No.53

発効日：2012.6.1　発行：うしく整形外科クリニック
住所：横浜市青葉区美しが丘1-13-1 電話：045-904-6937

うしクリ通信

薬のお話し

薬についていろいろな印象をお持ちだと思います。内服薬について、特に医療機関で処方させていただく**薬に不安をおもちの方が多くいらっしゃいます**。マスコミでたびたび薬害が報道されたり、ご自身でも副作用の経験があるためだと思います。

確かに不必要に薬を飲むのはよくないし、副作用もあり得ます。しかし、本来病気を治すためや痛みを軽減するために、**多くの研究者や企業が努力と時間と経費をかけて開発したものです**。発売前も後も副作用調査を充分にしています。それでも副作用は起こりえますが、**薬は病気を治し健康を取り戻すための有力な方法なのです**。

第二次大戦中にイギリスの首相チャーチルは、実用化されたばかりのペニシリンを服用して肺炎を克服し、自国を勝利に導いたという話は有名です。明治の頃までの平均寿命は50歳以下でしたが、20世紀後半から急速に先進国の平均寿命が延びています。これは公衆衛生の改善、食糧事情の向上も要因でしょうが、いろいろな薬剤が開発されたのも一因です。

乳幼児の感染症による死亡率が減ったことや、結核などの当時は死に至らしめるような病気が薬で治るようになったわけですから・・・。

薬に対する印象を悪くしている別の理由に、その昔、薬価差益が大きかった時代に、医師が過剰に薬剤を処方することがありました。薬価差益の無い現在では、薬を処方して医師が儲けることは不可能になっています（医薬分業が普及したこともあります）。医師にとって薬は大きな武器ですが、必要以上の量で副作用を増やしてしまっては元も子もありませんし、無用な種類の薬を投与することにメリットはありません。

手術をすると感染予防目的に抗生剤の投与をしますが、以前は1週間以上も投与されたり、抜糸するまで内服することがありましたが、現在は術後数日しか投与されなくなりました。抗生物質の過剰投与は、耐性菌を作ってしまうためひかえられるようになっています。

薬をうまく使えば大変効果的ですし、有効な使い方をされた患者様は良い印象をおもちです。反面、薬に過剰に頼る方もおられますが、何でもかんでも薬ではなく、**タイミング良く必要な期間だけ内服していただくことが大切です**。副作用に対する不安や質問があれば遠慮なく相談してください。是非薬は効くものだと思って服用していただきたいものです。

院長コラム

当院は開院して10年目を迎えることができました。地域医療の一役を担えるよう頑張ってきましたが、患者様から感謝の言葉をいただくとその意識も高まり、お叱りやご指導をいただくと改めて襟を正すという、ひとえに患者様に支えていただいた10年間だと感じています。

クリニックでできる治療には限界があり、基幹病院・大学病院への橋渡し役もするのですが、運動器疾患の場合大部分が生活習慣に起因することが多く、日常の負担や姿勢、運動不足の改善などで治療することができます。そういう意味で、当院で可能な医療を今後も提供しながら地域医療に貢献できればと思っています。